

< 孟子の王道 >

王何ぞ必ずしも利と曰はん。亦仁義有るのみ

孟子梁の恵王に見ゆ。王曰く、叟（翁）千里を遠しとせずして来る。亦將に以て吾が国を利する有らんとするか、と。孟子对えて曰く、**王何ぞ必ずしも利と曰はん。亦仁義有るのみ**。王は何を以て吾が国を利せんと曰い、大夫は何を以て吾が家を利せんと曰い、士庶人は何を以て吾が身を利せんと曰い、上下交々利を征（と）れば、国危うし。万乗の国、その君を弑する者は、必ず千乗の家なり。千乗の国、その君を弑する者は、必ず百乗の家なり。万に千を取り、千に百を取る、多からずと為さず。苟くも義を後にして利を先にすることを為さば、奪わずんば饜かず。未だ仁にしてその親を遺つる者は有らざるなり。未だ義にしてその君を後にする者は有らざるなり。王も亦仁義と曰わんのみ。何ぞ必ずしも利と曰わん、と。（梁恵王上 1）

古の人は民と偕に楽しむ

孟子梁恵王に対して曰く、
文王、民力を以て台を為（作）り、沼を為り、而して民これを歡樂す。その台を謂いて靈台と曰い、その沼を謂いて靈沼と曰い、その麋鹿魚鼈（びろくぎょべつ＝鹿魚すっぽん）有るを楽しむ。**古の人は民と偕に楽しむ**。故に能く楽しむなり。（梁恵王上 2）

偕樂園＝水戸の藩主、徳川斉昭が造園。金沢の兼六園、岡山の後樂園とともに日本三名園の一。梅の名所。

時の日害か喪びん。予女と偕に亡びん

（孟子曰く）湯誓に曰く、「**時の日害か喪びん。予女と偕に亡びん**」と。民これと偕に亡びんと欲せば、台池鳥獸ありと雖も、あに能く独り楽しまんや、と。（梁恵王上 2）

「商書」・湯誓に曰く、「尹尹、湯を相けて、桀を伐つ。升ること「こざと篇＋而＝じ」よりし（jiの要害を越えて不意を突き）遂に桀と鳴条の野に戦う。湯誓を作る。

夏王桀は、率いて衆力を涸れ果たし、夏の町の財産を剥ぎ取った。従って民衆たちは率いても怠けるばかり。そして口々に桀王を太陽に譬えて「この太陽はいつになったら亡びるのだろうか。もし消えうせるなら我が身も共に消えうせようものを」と言った。夏の徳たるやかくの如し。故に私は征伐せねばならないのだ、と。

五十歩百歩

梁恵王が「隣国より政治に心を尽しているのに何故人が増えないのか」孟子「それは王様が戦争を好み、他国と五十歩百歩だからです」と。(梁恵王上3)

治世の要道 自ら治世の責任を背負え！

農時を奪わず使役すれば穀物は食べきれないほど繁殖する
荒網で必要分の魚鱉を捕獲すれば食べきれないほど繁殖する
伐採すべきときに斧斤を山林に入れて木を伐れば使い切れないほど繁殖する
穀物や魚鱉が食らいきれず、材木が有り余るほどならば、民をして生きている者を十分養い、死者を十分弔うことができるというもの。

この生者を十分養い、死者を十分弔って遺憾なきようにすることこそが、王道の始めです。民に五畝の宅地を与え、これに桑を植えさせて養蚕をやらせれば、五十の者は帛（絹）を着て暮らせるし、鶏豚や狗猪などの家畜を時宜よく飼育すれば、七十の者でも肉を食って暮らすことができ、百畝の田畑を分け与え時を奪わず使役すれば、農耕が上手く行われて5, 6人の家族が餓えることはない。

そして庠序の教え（郷土の学校で教育すること）を謹厳に行い、加えて孝悌の義（道理）を悟らせるなら、**頽白の者（ごま塩頭の老人）道路に負載せず**。（重い荷物を背負わず済む）かくして七十の者が帛を着て、肉を食い、黎民（庶民）が餓えず凍えずするようになって、しかも王たらざる者は古来決して無いのである。

しかるに現今の諸侯たるや、狗豚が人間の食べるものを食しているのに、取り締まることもなく、道に餓えて倒れている人がいても米倉を開倉放出する令を発しもしない。人が餓死すれば「いや私が殺したのではない。凶年のせいだ」と言う。これじゃあどうして人を刺し殺しておいて「私のせいじゃない。武器がやったことだ」と言っていることに変わりない。**王歳を罪する無くんば、ここに天下の民至らん**、と。(梁恵王上3)

人を殺すに、梃（杖）を以てするも刃を以てするも政治を以てするも異ならず

庖（王の台所）に肥肉あり、厩舎に肥馬あり。民に飢色あり。野に餓莩（餓え死に人）有り。これでは獣を率いて人を食わしているようなものだ。**民の父母となって政を行う者の道**にあらず。(梁恵王上の4)

孟子のいう仁政 仁者に敵無し、王請う疑うこと勿れ

梁恵王「昔我が晉国は天下の覇者だった。私の代で東は齊に敗れ長男は死に、秦に七百里四方を失い、南は楚に辱めを受けている。私はこれを恥じている。何としても雪ぎたい」
孟子「領地が百里四方だって王たりえます。それには、
仁政を民に施し、刑罰を省き、税斂を薄くし、田畑を深耕して無駄草を取らせ、壮者には合間をみて孝悌忠信を修めさせ、父兄や目上の者を敬して従うようにすれば、杖ひとつで、秦楚の堅強な部隊を負かすことができるでしょう」 仁者に敵無し（梁恵王上5）

他人心あり。予これを忖度す。（「詩経」小雅の巧言）

為さざるなり、能はざるに非ざるなり

太山を挟（わきはさ）みて以て北海を超えんとす。人に語りて曰く、我能はず、と。これ誠に能はざるなり。長者の為に枝を折らんとす。人に語りて曰く、我能はず、と。これ為さざるなり、能はざるに非ざるなり。故に王の王たらざるは、太山を挟（わきはさ）みて以て北海を超えるの類に非ざるなり。王の王たらざるは、これ枝を折るの類なり。

吾が老を老として以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として以て人の幼に及ぼさば、天下掌に運らすべし。中略 故に恩（恵）を推せば、以て四海を保んずるに足り、恩を推さざれば、以て妻子を保んずる無し。古の人、大いに人に過ぎたる所以の者は、他無し。善くその為す所を推すのみ。今恩は以て禽獣に及ぶに足り、而も功は百姓に至らざる者は、独り何ぞや。權して然る後に輕重を知り、度して然る後に長短を知る。物皆然り。（梁恵王上の7）

權は重さをはかり、度は長さをはかる。

木に縁りて魚を求める

恒産無くして恒心無し

恒産無くして恒心有る者は、唯士のみ能くすることを為す。民の若きは、則ち恒産無ければ、因って恒心無し。苟くも恒心無ければ、放辟邪侈、為さざる無きのみ。罪に陥るに及んで、然る後、従ってこれを刑す。これ民を罔するなり。従って、名君は民の生産収入を定め、父母に仕え、妻子を養い、豊作の年は食い飽き、凶年には餓えなくする。これが出来なければ礼儀を治めている暇なぞないのだ。民に産を与え生活安定を（梁恵王上の7）

王、請う小勇を好むこと無かれ

それ剣を撫し嫉視して曰く、彼いずくんぞ敢て我に当たらんや、と。これ匹夫の勇、一人に敵する者なり。王、請うこれを大にせよ。 文王一たび怒りて、而して天下の民を安んぜり。(梁恵王下 1)

「詩経」・大雅の皇矣(こうい)。莒を乱暴な密人が伐とうとしたのを文王が威嚇して怒った。 莒は呂。「古書音同じければ、相借る者多し」

楽しむに天下を以てし、憂うるに天下を以てす

孟子、齊の宣王に曰く

民の楽しみを楽しむ者は、民も亦その楽しみを楽しむ。民の憂を憂う者は、民も亦その憂いを憂う。楽しむに天下を以てし、憂うるに天下を以てす。然り而して王たらざる者は、未だこれ有らざるなり。(梁恵王下 4)

晏子曰く、(1) 巡狩・述職が天子と諸侯の役目

巡狩 = 天子が諸侯に適(ゆ)くをいう。守る所を巡ること。

述職 = 諸侯が天子に朝するをいう。職とする所を述べること。

いずれも重要なことで、春は農耕するのを見て、不足している農具や足りないものを補ってやり、秋には収穫の状況を鑑みて収穫物や人手の不足を補ってやった。だから庶民は王の視察を大いに歓迎したものである。

晏子曰く、(2) 今の為政者たるや流連荒亡に耽って怠けている

流 = 流れに従いて下り、而して反るを忘れて遊ぶこと

連 = 流れに従いて上り、而して反るを忘れて遊ぶこと

荒 = 狩に出て、獣を追いかけてその楽しみにあきないこと

亡 = 酒を楽しみてこれにあきないこと。

(梁恵王下 4)

治世の要は「鰥寡孤独」など「無告の民」を先にせよ

斉の宣王が孟子に王政について訊いた。孟子曰く、昔文王が岐を治めたときは、税は井田法で、役所勤めは世禄制、関所はチェックするだけで一切の関税はかけず、池沼での漁には禁事無く、人を罰するにも当人のみで家族に累が及ぶことは無かった。そして文王が政を発し仁を施すに際しては、**鰥寡孤独の無告の民**を先にした。(梁恵王下5)

鰥 = 老いて妻がいない

寡 = 老いて夫がいない

孤 = 幼にして父がいない

独 = 老いて子がいない

この四者は、天下の窮民にして窮状を訴える所がない
無告の民であるから。**無辜の民** = 罪無き人々をいう

人材の登用は注意深くすべし

左右**皆賢人なり**と言っても未だ可ならざるなり。諸大夫**皆賢人なり**と言っても未だ可ならざるなり。**国人皆賢人なり**と言ひ、然る後これを察し、賢人なるを見て、然る後これを用いよ。左右の者が**皆不可だ**と言った場合も、**皆が殺せ**と言った場合も同様である。

(梁恵王下7)

侵略の法則 相手が喜ぶかどうかポイント

斉が燕を討って勝った。斉の宣王の「燕を取るべきか」の問いに応えて曰く、これ(燕)を取りて燕の民悦ばば、則ちこれを取れ。これを取りて燕の民悦ばずんば、則ち取ること勿れ。(梁恵王下11)

君仁政を行はば、ここに民その上に親しみ、その長に死なん。 上司次第

鄒と魯が戦った。鄒の穆公が孟子に「今度の戦いで**将校たちが三十三人戦死したのに、兵卒は将校のために死ぬ者がいなかった**。兵卒の非を知らしめるためにも該当者を誅罰しようとするば数が多すぎて殺し尽せぬし、それを許せば長上の戦死を見過ごすことを見逃すことになる。如何せん」と。

孟子曰く、「それは為政者や上官に仁愛が不足していた故だ。曾子曰く、「**これを戒めよ、これを戒めよ、爾に出づる者は、爾に反る者なり**」と。**君仁政を行はば、ここに民その上に親しみ、その長に死なん**。(梁恵王下12)

齊に付くか楚につくか自主独立でいくか

滕の文公が小国故に齊と楚のどちらに仕えるべきか孟子に訊いた。

孟子曰く、「難しい問題で自分の及ぶところではないが、どうしてもと言われるなら、一策申し上げよう。則ち、城の池を深く掘って、さらに城壁をさらに堅固に築き、民と共にこれを守り、死守しても民が去らないような信頼・結束が約束されるなら、それも採るべき策ではないでしょうか」と。民が王を信服してついてくるような仁政を施して、たとえ小国でも大国に抗する国を築くことも考えてみたらどうか、という提案である。(梁恵王下 13)

創業垂統して継ぐべきを為す かの成功の若きは則ち天なり。

(やるべきことをやったら、あとは天に任せよ)

滕の文公が齊が滕の近接地に城を築かんとしているのを心配して孟子に相談した。孟子は大王(文王の祖父)が邠にいて岐山に狄人を避けた故事を挙げて言った。

「苟しくも善を為さば、後世子孫、必ず王者有らん。君子業を創め統を垂れ、継ぐべきを為す。かの成功の若きは則ち天なり。君彼を如何にせんや。強めて善を為さんのみ」と。

(梁恵王下 14)

行止は人の能くする所に非ざるなり 吾の魯侯に遭わざるは、天なり

弟子の楽正子が孟子に会って言った。「私は魯の平公に先生に会われるように申し上げました。魯公も先生に会おうと馬車まで用意されました。ところがお気に入りの家臣に臧倉なる者があって、魯公が出ようとするのを阻んだため来る事ができませんでした」と。

孟子曰く、「総て人が出て行くのもそうせしめる或る者があるのであり、止まるのも止まるようにさせる或る者があるのである。行止は人の能くする所に非ざるなり 吾の魯侯に遭わざるは、天なり。臧氏の子、いづくんぞ能く予をして遭わざらしめんや」と。

(梁恵王下 16)

「知恵ありと雖も、勢いに乗ずるに如かず。鎡基ありと雖も時を待つに如かず

齊人の諺に「知恵ありと雖も、勢いに乗ずるに如かず。鎡基(農具)ありと雖も時を待つに如かず」とある。中略 餓うる者は食を為し易く、渴する者は飲を為し易し。孔子曰く、徳の流行するは、置郵(早馬や早飛脚)して命を伝うるより速やかなり、と。

(現在のような不徳で迷妄なる治世が行われているときは徳政は絶好のチャンスなり)

(公孫丑上 1)

我四十にして心を動かさざりき(不動心) 自ら反して縮ければ、千万人と雖も吾往かん

曾子かつて弟子の子襄に謂いて曰く、

吾かつて大勇を夫子に聞けり。自ら反して縮からずんば、褐寛博（賤しい身分の者）と雖も、吾惴（畏）れざらんや。自ら反して縮ければ、千万人と雖も吾往かん、と。

（公孫丑上２）

志は気の帥

それ志は気の帥なり。気は体の充なり。それ志至り、気次ぐ。故に曰く、その志を持し、その気を暴する無かれ。 志、壹なれば則ち気を動かし、気壹ならば則ち志を動かす。

（公孫丑上２）

浩然の気を養う

我善く吾が浩然の気を養う。敢て問う、何をか浩然の気と謂う。

曰く、言い難きなり。その気たるや、至大至剛、直を以て養うて害すること無ければ、則ち天地の間に塞がる。その気たるや、義と道に配す。これ無ければ餓う。 行いが心に慊（快）からざることあれば餓える。

・・・それを養うには いつも養うことをつとめ行え いつまでに効果をあげようなどと予期するな 心に忘れるな 助長するな（宋人の苗を助けて長ぜしめし者の如く又周りの雑草を放りばなしもいかん）

（公孫丑上２）

言を知る 諛辞、淫辞、邪辞、遁辞

諛辞＝その蔽う所を知る 偏った言葉を言うもの

淫辞＝その陷る所を知る 淫らな言葉を言うものは何かに溺れている

邪辞＝その離るる所を知る 正しい道から離れている

遁辞＝その窮する所を知る 逃げ口上を言っている

（公孫丑上２）

古代の学ぶべき人物像 願う所は孔子を学ばん

伯夷 = その君に非ざれば事えず。その民に非ざれば使わず。治まれば則ち進み、乱るれば則ち退く。

伊尹 = 何れに事うるとして君に非ざらん、何れを使うとしても民に非ざらん。治まるも亦進み、乱るるも亦進む。

孔子 = 以て仕うべくんば則ち仕え、以て止むべくんば則ち止み、以て久しかるべくんば則ち久しうし、以て速やかなるべくんば則ち速やかにする。

(公孫丑上 2)

王道と霸道 王霸の弁

孟子曰く、力を以て仁を仮る者は霸たり。霸は必ず大国を有す。徳を以て仁を行う者は王たり。王は大を待たず。湯は七十里を以てし、文王は百里を以てす。

力を以て人を服する者は、心服に非ざるなり。力贍(足)らざればなり。

徳を以て人を服する者は、中心悦びて誠に服するなり。七十子の孔子に服するが如きなり。詩に云う、西よりし東よりし、南よりし北よりし、思うて服せざる無し、と。此れの謂なり。(詩は大雅・文王有声篇 = 武王の徳を称えたもの)(公孫丑上 3)

自ら多福を求む

今国家間暇(小康状態)なりとせん。この時に及んで、般楽怠傲(大いに楽しみ、怠け遊ぶ)せば、これ自ら禍を求むるなり。禍福は己より之を求めざる者無し。

太甲に曰く、「天の作(為)せる孽は、猶違(避)くべし。自ら作せる孽は、活くべからず」と。(公孫丑上 4)

四端説 仁義礼智

孟子曰く、人皆、忍びざるの心有り。中略 人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行わば、天下を治むること、これを掌上に運らすべし。

今、人たちがまち孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心有り。交わりを孺子の父母に内るる所以に非ざるなり。その声を悪んで然るに非ざるなり。

これによりてこれを觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。羞惡の心無きは、人に非ざるなり。辭讓の心無きは、人に非ざるなり。是非の心無きは、人に非ざるなり。

惻隱の心は仁の端。羞惡の心は義の端。辭讓の心は礼の端。是非の心は智の端
(公孫丑上 6)

仁は天の尊爵なり。人の安宅なり。(公孫丑上 7)

天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。

(一考すべし。今は、人の和より地の利。地の利より天の時もあり)(公孫丑下 1)

大いに為す有らんとするの君は、召さざるの臣あり

大いに為す有らんとするの君は、必ず召さざる所の臣有り。謀ること有らんと欲すれば、則ちこれに就く。(教えをこちらから請いに行くものだ)

湯の伊尹に於ける、桓公の管仲に於ける総て然り。= 学んで然る後にこれを臣とした。

今、天下領土は同じくらいでその徳も同じようであり誰一人として他の諸侯を抜きん出る者がいないのは他無し。その教える所を臣とするを好んで、その教えられる所を臣とするのを好まないからだ。(公孫丑下 2)

市利を壟断(龍断)すべからず(利益の独占、ひとりじめ)

昔、市場での取引は、物々交換でお互いあるものをないものと交換していた。ある心の賤しい男(賤丈夫)が、市の立つたびに壟断(小高い丘のそばの所)を捜し求め、市場を見渡しては安いものを買占め市場の利益を独占した。役人も捨て置けず、商人に税金をかけることは、この賤丈夫から始まった。(公孫丑下 10)

彼も一時なり、此れも一時なり(あの時はあの時、この時はこの時)

孟子が斉を去った。弟子が孟子の不愉快そうな顔色を見ていった。「かつて私は先生から、君子は天を怨みず、人を尤めず、と。どうなされたのですか」と。孟子曰く、「彼も一時なり、此れも一時なり。云々」と。(公孫丑下 13)

孟子性善を道(言)い、言えば必ず堯・舜を稱す(たたえる、となえる、実証する)

それ道は一のみ。成鬪(せいけん = 斉の勇気ある人物)斉の景公に謂いて曰く、

「彼も丈夫なり。我も丈夫なり。吾何ぞ彼を畏れんや」と。

顔淵曰く、「舜何人ぞや、予何人ぞや。為すある者亦かくの若し」と。

書に曰く、「若し薬瞑眩せずんば、その病癒えず」と。(滕文公上 1)

君子の徳は風なり

上好き者あれば、下必ずこれより甚だしき者あり。(輪をかけてこのむようになる)

君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草これに風を尚うれば必ず偃す。

「論語」からの引用なり。(滕文公上2)

昼は爾于(行)きて茅かれ、宵は爾索(縄)を綯(な)え

昼は爾于(行)きて茅かれ、宵(よる)は爾索(縄)を綯(な)え

亟(すみやか)に其れ屋に乗れ 其れ始めて百穀を播かん

(「詩経」・豳風の七月。農民の生活情景)(滕文公上3)

夏・殷・周三代の税収法

(明治書院版の170P説明による)

時代	名称	方法や問題点
夏	貢法	数年間の収穫の平均を基準×10%徴収。豊作・凶作に無関係が問題
殷	助法	井田法。一夫に70畝授け、八戸の家共同耕作×10%。私田は無税
周	徹法	一夫に百畝授け、その年の実収穫量×10%(百畝中一畝分)を徴収

注：朱子は、助法を、六百三十畝の土地を九区井型に区切り、真ん中の一区画を公田とし、周囲の八区画を八家に分け、公田は共同耕作して租税としたと言っている。(滕文公上3)

孟子が語る学校の由来 庠序学校

時代	名称	内容
夏	校	郷学。教の意味で、民を教え導くことを学ぶ所から命名された
殷	序	郷学。射の意味で、射礼を習わせ才能を選ぶ所から命名された
周	庠	郷学。養の意味で、老人を養い敬う礼を行う所から命名された
三代	学	三代共通の国学で、天子や諸侯の国都にあるものを称した

人倫の道 = 父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有りを教えた。

(滕文公上3)

孟子の経済学 神農派・許行の説を論破す。物の齊しからざるは、物の情なり。

神農氏の教えだと言って学説を立て説きまわっている許行という者が楚の国から滕の国にやってきて滕文公に願い出て住居を定めた。門弟数十人と許行は、荒い毛布の着物を着、わらぐつを編んで打ち固めたり、筵を織ったりしてそれを売って生計をしていた。楚の儒者の門人で陳相なる者が弟の陳辛と一緒に宋から滕文公のところに鋤・鋤を背負ってやってきて住みついた。そして許行の説を聞いて大いに喜び儒学を捨てて許行の門に学んだ。陳相が孟子と会って、許行のおとを陳べた

陳相「滕の文公は、誠に賢君だ。だが未だ聖王の道は聞いておられない。賢者というものは、民と一緒に耕作して食し、朝夕の炊事万端を自ら行って、かつ天下の万民を治めていくものだ。しかるに今や滕には倉庫に穀物、府庫に財貨が満ちている。これらは自らが耕作したものではなく、人民から収斂して集めたもので、これでは人民を苦しめて文公自らを養っているというべきもの。どうして賢人といえようか」

孟子「許行は必ず自分で穀物を作り、然る後にそれを食すのか」

陳相「その通りです」

孟子「許行は必ず自分で布を織って、然る後にそれを着るのか」

陳相「いやそうではない。許行は目の荒い毛布の服を着ている」

孟子「許行は冠を被るか」

陳相「被ります。何の飾りも色どりもない冠を被ります」

孟子「その冠の布は、許行自身が織るのか」

陳相「いやそうではない。作った穀物と交換するのだ」

孟子「何故許行は自分で織らないのか」

陳相「自分で作っていても耕作の妨げになるから」

孟子「許行は釜や甑でものを煮たり、鉄製の鋤鋤などで耕作するのか」

陳相「然り」

孟子「その釜や農機具は自分で作るのか」

陳相「いや、そうではなく作った穀物と交換している」

孟子「するとだ、許行が何でも自ら手を下してやらねばならない、と主張している主旨と異なるではないか。私はお互いが物々交換することは相互に利益あることだと思うが。何故彼は自ら瀬戸物師や鍛冶屋の仕事をしなくて物々交換するのかね」

陳相「多くの工人の仕事は、耕作しながら片手間でやれる仕事ではないからだ」

孟子「じゃあ、冒頭に言った天下を治めるということだけが、耕作しながらできる仕事だとしても言うのかな。そんな馬鹿げたことはあるまい。そもそも世の中には上に立って政治をする所謂大人の仕事というものがあり、又下にいて農工商という仕事をすする所謂小人の仕事というものがある。かつ一人の者が何でもやってまかなおうとし

たら、忙しくて疲れ果ててしまう。だから古語にも「**或る者は心を勞し、或る者は力を勞す**」と言って**分業の理**が述べられているのだ。

心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治められる。人に治められる者は人を食(養)い、人を治める者は人に食なわれる。天下の通義である。お互いの役割だ。

以下、堯・舜以来の聖天子のことが述べられる。そして人倫の大切なことを述べ、**人倫の道 = 父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り**、を展開し、聖人の民を憂うことかくの如し。而るを耕すに暇あらんや、と。

陳相「許行の道に従うと、市場の物価は一定して、國中偽る者がいなくなる。五尺の童子でさえ市場に行き欺かれず買うことができる。なぜなら、**許行の主義**によれば、**麻布でも絹糸でも綿でもその目方が同じならば、定価はいつも同じ**であり、**五穀の升目さえ同じなら、その値段は常に同じ、履も大きさが同じなら値段は同一**であるのだから」

孟子「そもそも物には色々価値に違いがあって、総て同一でないのが物の自然である。だから価格にも差ができ、或る物は倍となり、或る物は十倍、百倍、又或る物は千倍万倍となるのである。しかるに君は総て比べて同一にしようとしている。これは実に天下を乱すものである。もし巨きな履と小さな履とが同じ値段だとすると一体誰が履を作るものか。許行のやり方に従うのは、人々を引き連れて皆まやかしをしようとする事だ。どうして国家を上手く治めることができるのか」

(滕文公上 4)

大丈夫たる者は己を枉げて利を取らず 「尺を枉げて尋(八尺)を直くす」は不当

弟子の陳代が、孟子に言った。「先生は何故自分から諸侯に面会を求めないのですか。小さな節操にこだわっておられるのではありますまいか。今一度諸侯に会われ、道理を説かれたなら大は王たらしめ、小は覇者たらしめられることができましょう。昔の記録に「**尺を枉げて尋(八尺)を直くす**」すなわち「一尺を曲げて八尺を直くできればよい」とあります。先生ももう一度小節を曲げてお会いに会ったら如何でしょうか」と。孟子曰く、

昔齊の景公が狩をしたことがある。そのとき、大夫を招くべき旌(せい)という旗を以て、虞人(山沢を管理する役人)を招いた。すると虞人は来なかった。すると景公は怒ってその虞人を殺そうとした。孔子はその話を聞いて、その招き方が礼義に適っていないければ断じて行かなかった虞人を誉めた。**“志士は溝壑に在るを忘れず(みぞや谷間にいつでも投げ捨てられる覚悟が必要だ)。勇士はその元(こうべ)を喪うを忘れず。”**虞人すらそうだ。君子が呼ばれもせずのこのこ行けるか。一尺を曲げて八尺を直くすればよい、というのは利のためにすること。そんなことはできない。己を枉げる者は他人を直に出来ない。(滕文公下の一)

大丈夫とは

天下の広居に居り(仁)、天下の正位に立ち(礼)、天下の大道を行く(義)。志を得れば民とこれに由り、志を得ざれば独りその道を行う。富貴も淫すること能わず。貧賤も移すこと能わず。威武も屈すること能わず。これこれを大丈夫と謂う。(滕文公下の2)

孟子の大行列への批判

弟子の彭更(ほうこう)が質問した。「先生のように後車数十乗、従者数百人、以て諸侯に伝食(つぎつぎ食禄を受ける)す。はなはだ傲慢にすぎはしませんか」

孟子「その道に非ずんば、すなわち一筆の食も人より受けるべからず。しかしもしその道(正等)ならば、則ち舜、堯の天下を受けるのも以て傲慢とはしない。」

彭更「土、事無くして食むは、不可なり」

孟子「お前は建具屋や大工や車輪を作るものたちを貴んでいるようだが、仁義の道を行いかつ教え広める者を軽んじておりはしないか」(滕文公下の3)

斉・楚大なりと雖も何ぞ畏れん

弟子の万章が孟子に訊ねた。「宋は小国です。今、まさに王政を行おうとしておられますが、もし斉・楚の大国がそれを憎んで討とうとしたらどうしたらよいでしょうか」

孟子「苟しくも王政を行わば、四海の内、皆首を挙げてこれを望み、以て君と為さんことを欲せん。**斉・楚大なりと雖も何ぞ畏れん**」(滕文公下の5)

取り巻きの重要性

孟子が宋の臣下である戴不勝に言った。「宋王が善良であることを願うなら、貴公が善人だと認める薛居州という人物一人くらいを王の側に置くだけではダメだ。他のまわりの者が皆悪玉なら、どうすることも出来ないのだから。それは言葉を習得することの如し。

例えば、今、斉の言葉をマスターさせようとする親がいたとして、親は子供を斉の人を先生にするか又は楚の人を先生にするかということを考えてみればよい。たとい一人の斉人が先生として斉語を教えても、楚人がそばでがやがや楚語を使っていたら、その子を鞭打って教育しても効果は無い。反対に子供を引っ張って行って、斉国の荘とか嶽とかの繁華街に住まわせ、数年間そこに置いたら放っておいても斉語を覚えるようなものだ。王を心から善導せんと思うなら、多くの薛居州(善人)を置かねばならない」と。(滕文公下の6)

肩を脅（そびや）かし諂い笑うは、夏畦（かけい）よりも病(疲)る

曾子曰く、肩を脅（そびや）かし諂い笑うは、夏畦よりも病(疲)る

（肩をすばめ首を低くして、へつらい笑いをするのは、真夏の畑仕事より疲れる）

（滕文公下の７）

もしその義に非ざれば即止めよ 何ぞ来年を待たんや

宋の大夫が言うには、「現在の税率が高く、関税や市場の営業税は人民の負担になるので、軽減したいと思う。ついては急にやるわけにはいかないので、来年を待って実施しようと思うがどうだろう」と。

孟子曰く、「今ここに毎日隣家の鶏を盗む者があったとしよう。ある人がこの男に告げて『そういう行為は君子のする道ではない』と諫めたとする。するとこの男は『それならどうだろう、毎日々一羽盗むのを月に一羽ずつ盗むことにし、来年になったら止めることにしたら』と。貴公の言はそれに変わらない。もしその義に非ざれば、ここに速やかにやめんのみ。何ぞ来年を待たんや」と。（滕文公下の８）

予豈弁を好まんや。予已むことを得ざればなり 孔子懼れて春秋を作る

弟子の公都子が言うには、「世間の人々は皆、先生のことを「弁論を好む者」だと称しています。あえてお尋ねしますが何ゆえでしょうか」と。

孟子曰く、予豈弁を好まんや。予已むことを得ざればなり、と。

堯・舜没してより聖人の道が衰えた。中略世衰え、道微にして、邪説暴行が又々起こるようになった。臣にしてその君を弑する者これあり。子にしてその父を弑する者これあり。孔子懼れて春秋を作る。春秋は天子の事なり（本来、大義名分を明らかにして毀誉褒貶を断ずるのは恐れ多くも天子たる人のなすべきことだ）。この故に孔子曰く、我を知る者は、それただ春秋か。我を罪する者も、それただ春秋か、（たいしたことをしたもんだと私が誉められるのも、大それた事をしたもんだと謗られるのも、『春秋』のためだ）と。

則ち、孔子も已むを得ず論評したのだ。（滕文公下の９）

徒善は以て政を為すに足らず。徒法は以て自ら行わるる能わず。

徒善は、いたずらに善心を懷くだけで実践されない善ではの意

徒法は、いたずらに形が整った法があったところでの意

（離婁上の１）

国の禍は、上に礼無く下に学なきこと

孟子曰く、城郭完（まった）からず、兵甲多からざるは、国の災に非ざるなり。田野辟（開）けず、貨財集まらざるは、国の害に非ざるなり。上礼無く、下学無ければ、賊民興り、喪ぶこと日無けん、と。（離婁上の１）

規矩（ぶんまわしとさしがね）は方員（方形円形）の至なり。聖人は人倫の至なり。

孟子曰く、規矩は方員の至（標準）なり。聖人は人倫の至なり。君たらんと欲すれば、君の道を尽し、臣たらんと欲せば臣の道を尽くす。二者皆堯舜に法（則）るのみ。

孔子曰く、道は二つ、仁と不仁のみ、と。その民を暴すること甚だしければ、則ち身弑せられ国亡ぶ。甚だしからざれば、則ち身危うく国削らる。これを名づけて幽・厲という。

幽は、暗愚の意　厲は虐待の意　則ち一般的に暗愚の君は幽と諡（おくりな）する。

（離婁上の２）

誠の廉士とは陳仲子の如く非ず

斉の匡章という者が陳仲子は誠の廉士（清廉潔白）だと孟子に言った。理由は以下の如し

<彼は兄の禄が不義であるとして家を飛び出し、於陵という所に住んだが、食物がないので三日間食わずにいた。そのため耳が聞こえなくなり、目が見えなくなった。幸い井戸のそばに李（すもも）の木があり、腹ばいになって虫が半分食い散らしていた実を拾って食い、やっと耳が聞こえ目が見えるようになったという>

孟子曰く、成る程陳仲子は斉の士の中では廉士といえよう。だが、真の廉士といえるだろうか。廉潔ということを履違えている。彼の主義を通そうとするならミミズになるしかない。何故なら、彼の住んでいる於陵の家は、伯夷のような仁人が作ったのかはたまた盗跖のような大盗人が作ったのか分からぬし、李だって誰が植えたか分かりはしない。

そもそも彼の家は代々斉の禄を食んでいる家柄だ。それを不義だとして兄を避け、母が作ってくれた鷺鳥料理が兄に贈られたものと知ったら、外へ飛び出して皆吐き出してしまったというではないか。ミミズじゃあるまいし、人間には陳仲子の如き廉潔を完璧に遣り通すことは不可能だ、と。（滕文公下の１０）

天下の興亡は仁と不仁にあり

孟子曰く、三代の天下を得るや仁を以てし、その天下を失うや不仁を以てす。

国の廃興存亡する所以の者も、亦然り。

天子不仁なれば、四海を保たず。諸侯不仁なれば、社稷を保たず。

卿大夫不仁なれば、宗廟を保たず。士庶人不仁なれば、四体を保たず。

(離婁上の3)

人を愛して親しまれずんば、その仁に反れ その身正しければ、天下これに帰す

孟子曰く、

人を愛して親しまれずんば、その仁に反れ。

人を治めて治まらずんば、その智に反れ

人を礼して答えずんば、その敬に反れ

行いて得ざる者あれば、皆これを己に反求す。

その身正しければ、天下これに帰す。

詩に云う「永く言(ここ)に命に配し、自ら多福を求む」(詩経・大雅の文王)

(離婁上の4)

天下の本は国にあり。国の本は家にあり。家の本は身にあり

孟子曰く、世の人は常に言う、「天下国家」と。

天下の本は国にあり。国の本は家にあり。家の本は身にあり

(離婁上の5)

天下道有れば・・道無ければ

孟子曰く、

天下に道有れば、小徳は大徳に役せられ(使われる)、小賢は大賢に役せらる。

天下に道無ければ、小は大に役せられ、弱は強に役せらる。

この二つの者は天なり。天に順なるは存し、天に逆らう者は亡ぶ。

(離婁上の7)

滄浪の水清まば、以て我が纓（冠の紐）を濯うべし

一人の童子が歌っていた。

「滄浪の水清まば、以て我が纓（冠の紐）を濯うべし。滄浪の水濁らば、以て我が足を濯うべし」と。

それ人必ず自ら侮りて、然る後人これを侮る。家必ず自ら毀(破)りて、然る後人これを毀る。国必ず自ら伐ちて、而る後人これを伐つ。太甲に曰く、**天の作せる孽は、猶違けるべし。自ら作せる孽は、活くべからず、と。**（離婁上の 8）

桀紂の天下を失える理由

桀紂の天下を失うや、その民を失えばなり。その民を失う者は、その心を失えばなり。天下を得るには道あり。その民を得れば、ここに天下を得る。その民を得るに道あり。その心を得れば、ここに民を得。その心を得るに道あり。欲する所はこれを与え、これを聚め、悪む所は施すなきのみ。（離婁上の 9）

七年の病に、三年の艾を求める

今の王たらんと欲する者は、猶七年の病に、三年の艾を求むるときなり。苟くも蓄えざるを為さば、終身得ず。（離婁上の 9）

自暴自棄 仁は人の安宅なり。義は人の正路なり

言、礼儀を非とする者を自暴といい、自分の身を仁に居き、義に由らぬのを自棄という。**仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。**だが人は安宅にいつこうとせず、正路に従って行こうとしない。哀しいかな。（離婁上の 10）

道は爾(近)きにあり

道は爾(近)きにあり。而るにこれを遠きに求む。事は易きにあり。而るにこれを難きに求む。人々その親を親とし、その長を長とせば、天下平かなり。（離婁上の 11）

「中庸の誠」の説と酷似文・・・誠は天の道なり。誠を思うは人の道なり

孟子曰く、下位に居て、上に獲られざれば、民得て治むべからざるなり。上に獲られるに道あり。友に信ぜられざれば、上に獲られず。友に信ぜられるに道あり。親に事えて悦ばれざれば、友に信ぜられず。親に悦ばるるに道あり。身に反して誠ならざれば、親に悦ばれず。

身を誠にするに道あり。善に明らかならざれば、その身を誠にせず。この故に誠は天の道なり。誠を思うは、人の道なり。至誠にして動かざる者は、未だこれあらざるなり。誠ならずして、未だ能く動かす者はあらざるなり。 (離婁上の 1 2)

君仁政を行わずしてこれを富ますは、皆孔子に棄てらるる者なり

求や季氏の宰となりて、能くその徳を改めしむる無く、而も粟を賦すること他日に倍せり。孔子曰く、求は我が徒に非ざるなり。小子鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり、と。これによってこれを觀れば、君仁政を行わずしてこれを富ますは、皆孔子に棄てらるる者なり。

善く戦う者は上刑にせよ・・・・・・戦争上手は最上の重い刑を
諸侯を連ねる者はこれに次ぎ・・・・・・諸侯を連合して野心を遂げんとする者はその次の刑
雑草の生い茂って荒れた土地を開墾して民に与え租税を収斂することばかり考える者は次
(離婁上の 1 4)

瞳をみれば人物を隠すことは出来ない。 (離婁上の 1 5)

君子が子を教えない理由・・・・古は子を易えてこれを教える (離婁上の 1 8)

一たび君を正しくして而して国定まる

君仁ならざれば仁ならざることなく、君義ならざれば義ならざることなく、君正しければ正しからざることなし。一たび君を正しくして而して国定まる。 (離婁上の 2 0)

慮らざるの譬あり。全きを求むるの毀あり。(毀誉褒貶は当てにならぬ。青天白日)
(離婁上の 2 1)

人その言を易くするは、責無きのみ。(自分自身の言葉に責任を感じていないから)

(離婁上の 2 2)

人の患いは、好んで人の師となるにあり。(離婁上の23)

(悦びて)足のこれを踏み、手のこれを舞うことを知らず。(離婁上の25)

符節を合わすごとし 先聖後聖、その揆一なり。

舜は東夷の人で、文王は西夷の人であった。土地は千里、年代も千年離れている。それなのに中国で行った事績に関しては、まさに符節を合わすごとく同じだった。先聖後聖、その揆一なり。(離婁下の1)

孟子、子産の恵人なるを批判す

子産は恵人だ、ということで有名だった。ある時、たまたま寒中に川を涉りあぐねている人を見て、気の毒に思い、自分の乗物で溱水や洧水を渡らせてやった、という。孟子はそれについてこう言った。「子産は恵人ではあるが、政治を知らない。秋の獲り入れが終わったら、農事の閑な時をを利用して民力を結集して大小必要な橋を作ればいいのだ。そうすれば人々が寒中に川を渉る必要がなくなる。このように、君子その政を公平にするなら、道を行く時に人ばらいさせても一向構わない。どうしてすべての人を自分の乗物で川を渡す事ができようか。故に、政を為す者は、人毎にこれを悦ばさんとせば、日も亦足らず」と。(離婁下の2)

君の臣を視ること手足の如くならば、則ち臣の君を視ること腹心の如し。

孟子曰く、君の臣を視ること手足の如くならば、則ち臣の君を視ること腹心の如し。君の臣を視ること犬馬の如くなれば、則ち臣の君を視ること国人(ただ路傍の人)の如し。君の臣を視ること土芥の如くならば、則ち臣の君を視ること寇讎(あだかたき)の如し

諫めて行われず、言聞かれず、膏澤(恩恵)が民に下らず。民服せず。

(離婁下の3)

中や不中を養い、才や不才を養う。故に人、賢父兄あるを楽しむ。(離婁下の7)

人為さざるあり。而る後以て為すあるべし。(離婁下の8)

人の不善を言わば、当に後患(後日の災い)を如何にすべき(離婁下の9)

(人の悪口などを言っていると、怨まれてしっぺ返しがあるぞ)

孟子曰く、仲尼は已甚（はなはだ）しきことを為さざる者なり、と。（離婁下の１０）

孟子曰く、大人なる者は、言必ずしも信ならず、行必ずしも果ならず。

ただ義の在る所のままなり、と。（離婁下の１１）

孟子曰く、大人なる者は、その赤子の心を失わざる者なり、と。（離婁下の１２）

自得すれば左右逢源

君子が道理の深奥に達するためには、種々の方法があって工夫するが、結局のところ真理を自得せんがためだ。自得してはじめて左右の茶飯事も源に逢うのだ。（離婁下の１４）

博学詳説こそ術学のためではなく道理の約（要点）を説かんがためだ。（離婁下の１５）

真の心服とは（覇者と王者）

善を以て人を服せしめんとする者は、未だ能く人を服することができない。

善を以て、人を養い育んでこそ能く天下を服することができる。

天下心服せずして王たる者は、未だこれあらざるなり。（離婁下の１６）

原泉混混として昼夜を舍かず。本あるものはかくの如し

孔子は水を称賛した。何故か。原泉混混として昼夜を舍かず。科（穴）に盈ちて而る後に進み、四海に放（至）る。本あるものはかくの如し。

声聞が実情に過ぎるのは、君子これを恥じる。（離婁下の１８）

人と禽獣の違い

孟子曰く、人の禽獣に異なる所以の者は幾（ほと）んど希なり。

仁義を守り人倫の道を守り行かうか否かだけの話だ。（離婁下の１９）

周公は禹、湯、文王の三王を兼ねる人物だ（離婁下の２０）

禹は、美酒を憎み善言を好んだ。湯は中を執り賢人を登用することに貴賤を問わなかった。

文王は人民を見ることあたかも己が身を傷つけるかのごとく、又道を望むこと限りなきがごとくした。武王は親近者に狎れることなく、疎遠なものにも粗略はしなかった。

周公は三王を兼ね、以て四事（四聖人の事跡）を施さんことを思う。合せざることあれば、仰ぎてこれを思い、夜以て日に継ぐ。幸いにしてこれを得れば座して以て旦を待つ。

「春秋」は魯の歴史

晉の乗、楚の檣杓（とうごつ）、魯の春秋は、一なり。春秋が記載するところは則ち齊の桓公、晉の文公の記事が主で、文章は魯の史官が書いた。（離婁下の21）

どちらを選択するか

取っても取らなくてもよい場合は取らぬ方がよい。取れば清廉であることを損なうから。与えるべきか与えなくてよいかの場合は与えぬ方がよい。無闇に与えると恵を損なう。死んでよく死ななくてもよい場合は、死なない方がよい。死ねば寧ろ勇を損なうから。
（武士道は死ぬ方を選択するが・・・・・・・・・・（離婁下の23）

古代中国にも武士道はあった。 孟之反の話参照のこと

かつて鄭国が衛国を侵略した。戦乱の最中、衛では弓の名人・庾公之斯（ゆこうしし）が、鄭の名人・子濯孺子を追った。子濯孺子が、「今日私は病に罹っているので弓を引けない。死ぬかもしれない」と言って、御者に訊いた。「我を追う者は誰か」と。御者「庾公之斯です」孺子「おお、じゃあ私は生きるだろう」御者「どうしてですか」孺子「庾公之斯は尹公之他に弓を学んだ。尹公之他は私の弟子だ。彼は正しい人物だ。彼が選ぶ友や弟子もきっと正しい筈だ」

間もなく庾公之斯が近づいた。そして子濯孺子に言った。「何故あなたは弓を取らないのか」孺子「今日はあいにく病甚だしく弓が引けないからだ」。すると庾公之斯曰く、「私は弓を尹公之他に学んだ。聞けばあなたは尹公之他の師とか。だからあなたを害するには忍びない。しかし私は主君の命令で追っている身。故に弓を射るのをやめるわけにはいかない」と。矢を抜き取り車輪に叩きつけて、やじりを取り去って、やじりのない四本の矢を射てそのまま引き返してしまった。（離婁下の24）

いくら西施が美人でも・・・

呉王お気に入りの西施でさえも不潔を蒙らば、則ち人皆鼻を被ってこれを過ぎるだろう。逆に悪人であっても、斉戒沐浴すれば、鬼神もこれを許すだろう。（離婁下の24）

存心の重要性 君子が他人と異なるのはその心を存するを以てなり（愛子様命名典故）

君子は仁を以て存心、礼を以て存心する。仁者は人を愛し、礼ある者は人を敬す。人を愛する者は、人恒にこれを愛し、人を敬する者は、人恒にこれを敬す。（離婁下の28）

富貴利達の亡者の話

齊の国に、一人の妻と一人の妾をもって一緒に暮らしている男がいた。男が外出すると、きまって酒肉に満腹しては帰宅するので、妻がいったいどなたと飲食されてくるのか、と訊くと、口から出る人物の名は錚々たる名士ばかり。そこで妻は不審に思い、妾に告げて言うには、「あの人は外出するたびに、酒肉を腹いっぱい食べたり飲んだりして帰ってくる。そして誰と食事を共にしたかと問えば、皆、富裕な方ばかり。それにしては今までそんな身分の良い方が一度だって我が家を訪れたことがないの。彼がどこへ行くのかそっとつけてみようと思う」と。

こうして朝早く起き、男の行く所を後から見え隠れにつけていった。ところが、齊の国中を歩き回るのだが、彼と話す人など一向に現れない。最後に東門郭外の墓場に来るや、喪葬をしている者の所に行き、祭りの余り物を貰っている。それでも足りない、四方を見回して、他の祭りをしている者を探し、そこで又もらい物をしている始末。これが良人の満腹してくる方法なのであった。

妻は家に帰り、妾に告げて言うには、「良人というものは、一生涯、仰ぎ望んで尊敬の的であるべきものです。なのに我が良人の情けないこと」と。そして妾と共に良人を謗り合って庭内で泣いていた。しかるに、良人はそんなこととはつゆ知らず、いつもの如く意気揚々と外から帰ってきて、妻や妾に向かって滔々と語るのであった。

孟子批評して曰く、君子よりこれを見れば、凡そ世の中で、富貴利達を求める者は皆この男のようなもので、その妻妾が恥じず、しかも泣かない者は殆どあるまいと思われる、と。
(離婁下の33)

天命 堯 舜 禹 啓

(万章上の5)

「書経」・泰誓に曰く、天の視るは我が民の視るに自(従)い、天の聴くは我が民の聴くに自う、と。

昔者堯、舜を天に薦めて、天これを受く。これを民に暴(あらわ)して、民これを受く。

堯崩じ、三年の喪畢(終わ)りて、舜、堯の子を南河の南に避く(自分が堯の子を避けて南河に退いた)。天下の諸侯朝勤する者、堯の子に之かずして、舜に之く。訟獄する者、堯の子に之かずして、舜に之く。謳歌する者、堯の子を謳歌せずして、舜を謳歌す。故に曰く、天なり、と。それ然る後中国に之き、天子の位を踐(ふ)めり。而るを堯の宮に居り、堯の子に逼(せま)らば、これ篡(うば)うなり。天の与えるに非ざるなり。

昔者舜、禹を天に薦めむること、十七年。舜崩じ、三年の喪畢(終わ)りて、禹、舜の子を陽城に避く。天下の民これに従うこと、堯崩ずるの後、堯の子に従わずして、舜に従うごときなり。禹、益を天に薦むること七年。禹崩じ、三年の喪畢(終わ)りて、益、禹の子を箕山の陰(北)に避く。朝勤・訟獄する者、益に之かずして、啓に之く。云々

之を為すことなくして為る者は天なり。之を致すことなくして至る者は命なり。

天、賢に与うれば則ち賢に与え、天、子に与うれば則ち子に与う。

人物評（万章上の7～万章下の1）

1．伊尹

伊尹は湯王に用いられようとして、先ず料理人となって住み込み、料理のことから近づいたという説あり。

孟子は、さにあらず、彼は有辛の野に耕して、堯・舜の道を楽しんでいた、と。

彼はその義に非ざれば、たとえ天下を以て俸禄として招いたとしても顧みなかった。又その道に非ざれば、たった一本の草でさえ人に与えず、又人から受けなかった。

湯が使いを出して招聘したが来なかったが、再三使者をやって懇請したので、遂に「こうして田野で堯・舜の道を楽しむより、湯王に仕えて湯王を堯・舜たらしめる方が優れたことだ。又この民を教え導いて、堯・舜の民にする方が立派なことだ。

天のこの民を生ずるや、先知をして後知を覚らしめ、先覚をして後覚を覚らしむ。我は天民の先覚者なり。我まさにこの道を以てこの民を覚さんとす。我これを覚すに非ずして誰ぞや」と。

孟子曰く、吾れ未だ己を枉げて人を正す者を聞かざるなり。況や己を辱めて、以て天下を正す者をや。聖人の行いは同じからざるなり。或は遠ざかり（世を避け隠遁する）、或は近づき（積極的に仕官する）、或は去り或は去らず。その身を潔くするに帰するのみ、と。

2．孔子

孔子曰く、命あり、と。孔子は進むに礼を以てし、退くに義を以てす。これを得ると得ざるとは、命ありと曰う。

3．百里奚

百里奚は虞の人である。晉人が垂棘から産出する玉と屈に産する良馬を虞に贈り物して、それで軍隊の通行する道を虞に借りて、虢の国を伐ったことがある。宮之奇は諫め、百里奚は諫めなかった。虞公を諫めても無駄だと知ったからで、去って秦に行った。年すでに七十歳だった。やがて彼は秦の穆公に挙用され、宰相として穆公を天下に知らしめた。

4．伯夷

伯夷は目に悪色（不正の色）を見ず、耳に悪声（不正の声）を聴かず。
その君に非ざれば事えず。その民に非ざれば使わず。
治まれば則ち進み、乱るれば則ち退く。
伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉直に、怠惰者も志を立てるようになった。

5．伊尹

伊尹曰く、何れに事うるとして君に非ざらん。何れを使うとして民に非ざらん、と。
治まるも亦進み、乱るも亦進む。自ら任ずるに天下の重きを以てした。

6．柳下恵

柳下恵は汚君を恥じず。小官を辞退せず。進んで賢人たるを隠さず、必ずその道を以てす。
爾は爾たり、我は我たり。肩脱ぎしている者があっても気にしない。故に彼の風を聞く者は、鄙夫も寛大になり薄情者も厚くなった。

7．孔子

以て速やかなるべくんば速やかに、以て久しかるべくんば久しうし、以て處るべくんば處り、以て仕うべくんば仕えるのが孔子なり。

【結論】孔子は集大成（万章下の1）

孟子曰く、伯夷は、聖の清なる者なり。伊尹は、聖の任なる者なり。柳下恵は、聖の和なる者なり。孔子は、聖の時なる者なり。孔子をこれ集めて大成すと謂う。（集大成）

周時代の爵位（万章下の2）

天子、公、侯、伯、子、男
君、卿、大夫、上士、中士、下士

周時代の制度概要

天子の制度

土地の広さ

1. 天子 : 方千里 天子の卿は侯に準じ、大夫は伯に準じ、上士は子・男に準ず
2. 公・侯 : 方百里
3. 伯 : 七十里
4. 子・男 : 五十里

大国（公・侯の国）の制度・・・方百里

1. 君の俸給：卿の 10 倍
2. 卿の俸給：大夫の 4 倍
3. 大夫の禄：上士の 2 倍
4. 上士の禄：中士の 2 倍
5. 中士の禄：下士の 2 倍
6. 下士の禄：平民で役人になっているものと同額。＝百畝の田からの収穫量に準ず。

次国（伯の国）の制度・・・・方七十里

1. 君の俸給：卿の 10 倍
2. 卿の俸給：大夫の 3 倍
3. 大夫の禄：上士の 2 倍
4. 上士の禄：中士の 2 倍
5. 中士の禄：下士の 2 倍
6. 下士の禄：平民で役人になっているものと同額。＝百畝の田からの収穫量に準ず。

小国（子・男の国）の制度・・・方五十里

1. 君の俸給：卿の 10 倍
2. 卿の俸給：大夫の 2 倍
3. 大夫の禄：上士の 2 倍
4. 上士の禄：中士の 2 倍
5. 中士の禄：下士の 2 倍
6. 下士の禄：平民で役人になっているものと同額。＝百畝の田からの収穫量に準ず。

耕作する者の収入は、一夫で 100 畝。上農は 9 人、上の次は 8 人、中農は 7 人、中の次は 6 人、下農は 5 人を養うことができる。庶人で官吏にある者もやはり 5 段階で収入の差をつける。猶、上中下とは、土地の肥沃・荒廃を以て決める。（万章下の 2）

貴貴と尊賢

舜は匹夫の身から挙げられて天子となった。堯は天子でありながら、娘を嫁しかつ舜を饗応した。このように、
下にある者が上を敬するのを、貴を貴ぶといい、
上にある者が下を敬するのを、賢を尊ぶという
貴を貴び、賢を尊ぶ。その義一なり。(筋道は一つだ) (万章下の3)

職責の考え方 (万章下の4)

孔子が委吏(倉庫番)となったとき曰く、「会計がキチンと合うことが任務」と。乗田(牧畜官)になったときに曰く、「飼育している牛羊が肥えて成長することが任務」と。
位卑しくして言高きは、罪なり。人の本朝に立ちて、道行われざるは、恥なり。
(身分が低いときに国政云々など僭越な言は無用、高位高禄を食んで道を為しえぬ者は恥)

市井の臣と草莽の臣

国都に住んでいる者を「市井の臣」、田舎に住んでいる者を「草莽の臣」という。
いずれも庶人、則ちまだ仕えない者のことをいう。(万章下の7)

尚友

一郷の善士は、ここに一郷の善士を友とす。
一国の善士は、ここに一国の善士を友とす。
天下の善士は、ここに天下の善士を友とす。
天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと為すや、
又、古の人を尚論す(古に遡って論究すること)。
その詩を頌し、その書を読むも、その人を知らずして可ならんや。
ここを以てその世を論ず。これ尚友(古人を友とする)なり。(万章下の8)

貴戚の卿と異戚の卿 (名文なり！)

齊の宣王が孟子に「卿の身分のものがなすべきこと」を訊ねた。
貴戚の卿 = 君大過あれば、則ち諫む。これを反復して聴かれざれば、則ち位を易う。
異戚の卿 = 君過ちあれば則ち諫め、これを反復して聴かざれば、則ち去る。
(万章下の9)

人間の性に関する説 (告子上の1～6)

告子・・・人の本性には善も無く、不善もなく白紙のようだ。どちらともいえぬ。

ある人・・・人の本性は善を為すことも出来るし、不善を為す事も出来る。

文王・武王の如き仁君でれば感化され善を好み、桀・紂出れば不善を好む

ある人・・・性の善なる人もあるし、性の不善なる人もある。堯がいるのに象、紂にして比干あり。

孟子・・・人の性はすべて善なり。

荀子・・・性悪説。人間の性は悪。礼法による秩序維持を重要視。

万人同性論

富歳には若者たちの善を為す者多く、凶歳には暴虐を為す者が多い。これは天が人に違った性質を与えたのではなく、凶年には物資不足なるがゆえに、彼らの心を陥溺（穴に陥れる）させてしまうからだ。今、大麦を蒔き、その上に土をかぶせたとする。その土地も同じで、蒔いたときも同じである。なのに成熟して取り入れてみると、出来不出来が生ずる。何故だろう。それは土地に肥沃なところと瘠せたところがあり、雨露の養いや農夫の手入れに差が生じたためだ。故に凡そ類を同じくするものは、皆相似たり。聖人も我も種類を同じくするものである。

口でものを味わう場合、誰もがおいしいと好むところのものがあり、耳で聞く場合、誰もが同じくよい声だとして耳を傾けるところのものがあり、目で色を見る場合、誰でもが美しいとするところのものがある。心についても同じだろう。聖人というものは、我々の心の中でそうだと思うところの事を、真に会得した人であるに違いない。（告子上の7）

牛山の木・・・平坦の氣（＝夜氣）

牛山の木かつて美なりき（美しく茂っていた）。ところが、牛山は齊という大国の国都の郊外にあったので、斧や斤（まさかり）で伐り倒されてしまった。だから美とはいえない状態になってしまったのだ。そして折角、日夜に生長しようとする生命力や、雨露が潤すことによって芽生えようとする、人が牛羊を放牧するので食べられてしまい、あのように濯濯（つるつる）した禿山になってしまった。人々はその禿山を見て、昔から材木がある山ではなかったのだ、と思ってしまう。本当に牛山の本性といえるだろうか。言えない。

人の心についても同じだ。仁義の心がなかろうや。良心を失うのは斧斤によって伐りとられるからだ。平坦の氣があっても、昼間にそれを伐り取られれば、夜氣（平坦の氣）を存することが出来なくなってしまう。（告子上の8）

心とは・・・孔子の言

孔子曰く「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡す。出入時無く、その郷を知るることなしとは、ただ心の謂か」と。

（操り守れば存するが、ほおっておけばなくなってしまう。その出入りは一定の時がなく、その故郷（居場所）を知ることができない、という古語があるが、それはこの心のことを言ったのであろうか）（告子上の８）

一暴十寒 専心致志

孟子曰く、齊王よ、王の不智をあやしむなかれ。天下生じ易きの物ありと雖も、一日これを暴（温）め、十日これを寒（冷）せば、未だ能く生ずる者あらざるなり。私が見えるのは稀であり、私が退いた後、これを冷やそうとする者がやってくる。折角萌した王の良心を私は如何ともしがたい、と。今、弈の数（技）たる、少数なれど、**専心致志**せざれば得ず。弈（碁、博打）の名人・弈秋に習う童子二人の例。（告子上の９）

人には、いざとなったら、生や死以上のものがある

孟子が言うには、食べるには魚も欲しいし熊掌も又ほしい。どちらか一つを選べというなら、私は魚を棄てて熊掌を取る。同じように、生は私の望む所であり、義を守ることと又望む所である。いざ二者を兼ねることが出来ない場合、私は生を棄てても、義を守る方を選ぶ。死ぬのは嫌だが、いざとなったら避けられないのは同様である。

人がもし、生を好むこと甚だしければ、生きていくためにはどんなことでもやってしまいかねない。又、死を惡むこと甚だしければ、死の患いを避けるためには、どんなことでもやってしまいかねない。

この故に、欲する所、生より甚だしき者あり。惡む所、死より甚だしき者あり。独り賢者のみこの心あるに非ざるなり。人皆これあり。賢者は能く喪うことなきのみ。（告子上１０）

大利大禄には目が眩むのが人間の弱さなり

人というものは、いかに餓えていても、僅かばかりの食べ物、叱るような口調や足蹴にするような態度で、「ほれ、食え」と言われても、受けることを潔しとはしないものだ。しかし、「万鍾の大禄を受けるとなると、礼儀に適おうが適うまいが、平気でこれを受ける。住居を立派にするために使われるのか、又は妻妾を養うためにか、又は知人に恵まんとしてだろうか。小利には不義にも目を眩ますことがなかった者が、大利・大禄には不義を知って受け取る。こういうのを「その本心を失う」というのだ。（告子上１０）

仁は人の心なり。義は人の路なり。学問の道は、放心を求むるのみ。

仁は人の心なり。義は人の路なり。その路を捨てて由らず。その心を放ちて求むることを知らず。哀しいかな。人、鶏犬の放つことあれば、則ちこれを求むることを知る。放心あって、求むることを知らず。学問の道は他無し。その放心を求むるのみ。(告子上 1 1)

無名の指(薬指)が曲がっていれば・・・晉・楚の道を遠しとせず。

孟子が言うには、人というものは、仮に薬指が曲がっていて、特に仕事にさしつかえるというわけでもないのに、良い医者が出て、それを伸ばしてくれると聞いたら、晉・楚の遠い国でも遠しとせず出かけて行って治してもらうものだ。
自分の薬指が他人に劣っているからだ。だが、自分の心が他人に及ばないといって、そうする者がいないのはどうしてだ、と。(告子上 1 2)

拱把の桐梓(とうし)を養うが・・・

孟子曰く、人は拱把(両手や片手で握るほど)の桐や梓を養う方法を知っている。なのに自分の身を養う方法は知らない。きっと我が身より桐や梓が大切なのだろう、と。(告子上 1 3)

大人と小人の違い 心の官(はたらき)は則ち思う。

公都子「どして同じ人間なのに、ある人は大人、ある人は小人となるのか」

孟子「大体に従う者は大人となり、小体に従う者は小人となる」

公都子「どういう意味でしょうか」

孟子「耳目のはたらきは、外物に影響され、見聞きしたことに引きずられる。

心の官(はたらき)は則ち思う。思えば道理を得ることができる。

耳目のままに行動するを小人、心で思慮した後行動するを大人という」

(告子上 1 5)

天爵と人爵 (告子上 1 6)

天爵なるものあり。人爵なるものあり。

仁義忠信、善を楽しみて倦まざるはこれ天爵なり。公卿大夫は、これ人爵なり。

古の人は、その天爵を修めて、人爵これに従えり。

今の人は、その天爵を修めて、以て人爵を要(求)む。既に人爵を得れば、天爵を捨つ。

趙孟の貴くする所は、趙孟能くこれを賤しくす。

孟子曰く、人爵なるものは当てにならぬ。例えば、晉の権力者である趙孟が与えた人爵など、彼の一存で又、それを賤しくもできるのだから。(告子上 17)

仁の不仁に勝つは、猶水の火に勝つがごとし。

孟子曰く、仁の不仁に勝つは、猶水の火に勝つがごとし。今の仁を為す者は、猶、一杯の水を以て、一車薪の火を救うがごときなり。(仁を行うのが少なすぎるから不仁に勝てないのである、の意) (告子上 18)

五穀は種の美なるものなり

孟子曰く、五穀は種の美なるものなり。苟しくも熟さざれば、莠稗(雑草)に如かず。それ仁も亦これを熟するにあるのみ。(告子上 19)

道を学ぶ方法

孟子曰く、羿は弓の名人だが、人に射を教える時、**必ず弓を引き絞って今にも発射せんとする頃合**を眼目として教えた。(コウに志す)

大匠(大工の棟梁)が人に教えるときも必ず**規矩(ぶんまわしやさしがね)**を以てす。学者も亦必ず規矩を以てす。(告子上 20)

人皆以て堯・舜たるべし

孟子曰く、堯・舜の道は、孝弟のみ。子(弟子の曹交)、堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行いを行わば、これ堯のみ。子、桀の服を服し、桀の言を誦し、桀の行いを行わば、これ桀のみ。

それ道は大路のごとく然り、と。(告子下の 2)

五霸は、三王の罪人なり

五霸は三王の罪人なり。今の諸侯は、五霸の罪人なり。今の大夫は、今の諸侯の罪人なり。

五霸 = 齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の荘王(趙注)

五霸 = 齊の桓公、晉の文公、楚の荘王、吳王闔閭、越王夫差(荀子)

(告子下の 7)

葵丘の会盟の内容

五霸は桓公を盛んなりとす。葵丘の会盟は、

- 1．不孝を誅せよ。世嗣を変えるべからず。妾を本妻にすべからず。
- 2．賢者を尊び、才能ある者を育成し、以て徳のある者を世にあらわせ。
- 3．老人を敬い、幼児を慈しみ、客や旅人を粗末にするなかれ。
- 4．土は俸禄を世々に伝えても構わぬが、官職を継がせてはならぬ。又官職を兼ねることはならぬ。土を得るには必ず適材を得よ。勝手に大夫を殺してはならぬ。
- 5．堤を曲げて作ってはならぬ。（自国の都合主義ゆえに） 隣国の飢饉に際しては、穀物の輸出を禁じてはならぬ。人に土地を与えたら必ず天子に報告すべし。

（告子下の7）

税金は10%が適当なり

白圭が税金を20分の1にしようと言った。孟子は反対した。それは辺境民族のすることだ。

北方夷狄では五穀が育たず、黍だけを食っている。故にそれでいい。

中国は礼儀ある国だ。祭祀・交際が必要だし、百官も必要だ。だから税金は欠かせない。

堯・舜が決めた税率の10%はいいところだ・以下でも以上でもいけない、と。

（告子下の10）

天の將に大任を是の人にくだすさんとするや （告子下の15）

孟子曰く、舜は畎畝（田んぼ）の中より発（起）り、傳説は版築（道路工事）の間より挙げられ、膠鬲（こうかく＝紂に仕えた賢者）は魚塩の中より挙げられ、管夷吾は土より挙げられ、孫叔敖（楚の莊王の令尹）は海より挙げられ、百里奚は市（井に隠れていて秦の穆公の宰相）より挙げらる。

故に**天の將に大任を是の人にくだすさんとするや**、必ず先ずその心志を苦しめ、その筋骨を勞せしめ、その体膚を餓えしめ、その身を空乏にし、行うところその為さんとする所に拂乱せしむ。心を動かし性を忍ばせ、その能くせざる所を曾益せしむる所以なり。

人恒に過ちて、然る後に能く改め、心に困しみ、慮に衡（横た）わって、而る後に作（興）り、色に徴（表）れ、声に発して、而る後に喩る。

入りては則ち法家・拂士（法を守る世臣・輔弼の賢士）無く、出でては則ち敵国・外患無き者は、国恒に亡ぶ。然る後に、憂患に生じて、安楽に死することを知るなり、と。

（告子下の16）

孟子曰く、教えも亦術多し。「教誨を屑（いさぎよ）しとしない」のも亦立派な教育。

盡心者はその性を知る者なり 「安心立命」「人事を尽して天命を俟つ」

孟子曰く、その心を盡す者は、その性を知るなり。その性を知れば、則ち天を知る。その心を存し、その性を養うは、天に事うる所以なり。

天壽不貳（疑わず）。身を修めて以てこれを俟つは、立命たる所以なり。（盡心上の１）

孟子曰く、堯・舜は性のままなる者なり。湯・武はこれに反るなり（修養努力して本性に返る者なり）。君子は法(人の道)を行いて、以て命を俟つのみ。（盡心下の３３）

命に非ざるなきなり。

孟子曰く、命に非ざるなきなり。その正を順受すべし。（天から与えられた正命を素直に受けよ）この故に命を知る者は、巖牆（危ない巖や垣）の下に立たず。その道を盡して死する者は正命なり。桎梏（足かせ手かせ）して死する者は、正命に非ざるなり、と。（盡心上の２）

我に在る者と外に在るもの

我に在るもの・・・仁義礼智などの天爵は自ら求めれば得られ、すてれば失われる
外に在るもの・・・富貴・栄華など人爵は、求めるに相応の方法と天命により得失があり、求めても必ずしも得られない。（盡心上の３）

万物皆我に備わる （盡心上の４）

恥を知る

孟子曰く、人は以て恥づること無かるべからず。恥づること無き（厚顔無恥なる）をこれ恥づれば、恥なし、と。（盡心上の５）

孟子曰く、恥の人に於けるや大なり。機変の巧(臨機応変にその場を切り抜ける)を為す者は、恥を用うる所無し。人にしかざることを恥じずんば、何ぞ人にしくことあらん、と。
（盡心上の５）

男たるもの

孟子曰く、士は窮しても義を失わず。達しても道を離れず。（盡心上の９）

豪傑なる者は

孟子曰く、文王を待ちて、而る後に興る者は、凡民なり。
かの豪傑の士のごときは、文王無しと雖も猶、興る。（盡心上の１０）

民という者

孟子曰く、民という者は、安んじ勞う目的があって使えば、勞すと雖も怨まぬ。
民を生かさんと思うてやったことにより、民が死んでも、殺した者を怨まぬものだ。
（盡心上の１２）

良知・良能

孟子曰く、人の学ばずして能くする所の者は、その良能なり。
慮らずして知る所の者は、その良知なり。（盡心上の１５）

徳智ある人は苦勞人

孟子曰く、徳慧・術知ある人は、恒に**疾疾（ちんしつ＝災患）のある者**に存す。
君から疎んじられて孤立する家臣や親の愛情に疎遠な妾腹の子などは、「心を操ること危うく、憂いを慮る事深い。故に達す（知恵や世相に長じるのである）と。（盡心上の１８）

君子の三樂

孟子曰く、君子に三樂あり。而して天下に王たるは、与り存せず。
父母俱に存し、兄弟故無きは、一の楽しみなり。
仰ぎて天に愧じず、俯して人に愧じざるは、二の楽しみなり。
天下の英才を得て、これを教育するは、三の楽しみなり。
君子に三樂あり。而して天下に王たるは与り存せず。（盡心上の２０）

徳ある者は、面に見れ、背に溢れ、四体に施き、四体言わずして喻る

君子の性とする所は、仁義礼智、心に根ざす。
その色に生ずるや、睥然として面に見われ、背に溢れ、四体に施き、四体言わずして而して喻る。（一見して徳あることが知られる）（盡心上の２１）

孟子の「水道哲学」

孟子曰く、日暮れに人の門戸を叩いて水火を求めると、誰しもこれを与えないものが無いのは、水火が十分あるからである。聖人が天下を治めるには、米穀豆類が水火のごとく豊富ならしめるのである。だから不仁者がでないのだ。(盡心上の23)

高所からみれば・・・

孟子曰く、孔子東山に登りて魯を小とし、太山(泰山)に登りて天下を小とす。
(盡心上の24)

舜と盗跖の違い

孟子曰く、鶏鳴きて起き、せつせと善を為す者は舜の仲間である。せつせと利を為す者は盗跖の仲間である。舜と盗跖の差は他無し、利と善の差だ。(盡心上の25)

楊子と墨子と子莫の思想 孟子の批判

孟子曰く、楊子は個人主義を唱えた。墨子は兼愛(誰も彼も同じように愛す)を唱えた。子莫(?)はその中間を唱えた・
中を執るこはこれに近しと為すも、中を執りて権すること無ければ(TPOに従い検量せねば)、猶、一を執るがごときなり。一を執るに悪む所は、その、道を賊すためなり。一を挙げて百を廃すればなり、と。(盡心上の26)

ネバーギブアップ精神重要

孟子曰く、為すことある者は、**辟えば井を堀るがごとし**。井を掘ること九韌、而も泉に及ばざれば、猶、井を棄つと為すなり、と。(盡心上の29)

素餐せず

公孫丑曰く「詩経・魏の国風」に、素餐せず(功無くして禄を食んではならない)とあるが、君子が耕さずして食らう(徒食)のは如何でしょうか」と。孟子曰く、「君子が或る国にいる時、その君が君子の言を用いば、その国が安富尊栄になり、その子弟は孝悌忠信になる。故に素餐していないことよりずっと大きな好影響を与えることになる。君子は肉体労働しなくても、十分世の役立ちをするのだ」と。(盡心上の32)

士たるものの務め 尚志

齊王の子が孟子に「士は何を務めとするのか」と訊いた。孟子曰く、「志を尚くす」と。

王子「何をか尚志というか」

孟子「仁義のみ」

(盡心上の 3 3)

居は氣を移す(居るところの位が氣象を变化させる)

孟子が齊の范という町から、齊の国都に行ったとき、齊王の子をはるかに望み見て、喟然(きぜん)として嘆息して言うには、「**居は氣を移し、(栄)養は体を移す。大なるかな居や。それことごとく皆人の子であるのに**」と。又曰く、「王子の宮室・車馬・衣服は多くの人とそう変わらない。なのに王子があのように立派に見えるのは、居る所の位がそう見えさせるのだ。魯の君が宋にいったとき、門番の声が宋君に似ていた。これ他無し。居相似たればなり」と。(盡心上の 3 6)

愛と敬

孟子曰く、食(養)いて愛せざるは、これを豚と交わるといい、愛して敬せざるは、獸を養うという。(盡心上の 3 7)

教育の五法

孟子曰く、君子の教授法には五通りある。

- 1 . 時雨のこれを化するが如き者あり 自然に草木を育てるやり方
- 2 . 徳を成さしむる者あり 各人の持っている徳性如何に応じて助長
- 3 . 財を達せしむる者あり 各人の才能によって開花させるやり方
- 4 . 問いに答うる者あり 人の問いに答えてやる方法
- 5 . 私淑艾せしむる者あり 間接的に教える法。

(盡心上の 4 0)

大匠は拙工の為に縄墨を改廃せず。

(盡心上の 4 1)

その進むこと鋭き者は、その退くこと速やかなり。 (盡心上の 4 4)

仁者

孟子曰く、仁者はその愛する所を以て、その愛せざる所に及ぼし、不仁者はその愛せざる所を以て、その愛する所に及ぼす。 (盡心下の1)

孟子曰く、春秋に義戦無し。 (盡心下の2)

孟子曰く、盡く書を信ぜば、則ち書無きに如かず。(無い方が良い) (盡心下の3)

殺し合い 報復は無意味

孟子曰く、吾今にして而る後、人の親(しん)を殺すの重きを知るなり。
人の父を殺せば、人も亦その父を殺し、人の兄を殺せば、人も亦その兄を殺す。
然らば則ち自らこれを殺すに非ずや、一間のみ、と。 (盡心下の7)

妻子にも行われず

孟子曰く、身、道を行わざれば、妻子にも行われず。人を使うに道を以てせざれば、妻子にも行わるること能わず、と。 (盡心下の9)

利と徳に周き者

孟子曰く、利に周きものは、凶年も殺すこと能わず。
徳に周き者は、邪世も乱すこと能わず。 (盡心下の10)

不仁者の運命

孟子曰く、不仁にして国を得る者はこれあらん。不仁にして天下を得るは、未だこれ有らざるなり。 果たしてそうか？ 北朝鮮、イラク (盡心下の13)

聖人は百世の師なり。・・親炙(薫陶教化されること)する者に於いてはことにそうだ。
(盡心下の15)

昭昭と昏昏

孟子曰く、賢者はその昭昭を以て、人をして昭昭たらしむ。

今はその昏昏を以て、人をして昭昭たらしめんとす、と。 (盡心下の 2 0)

山径の蹊 (けい = 足跡) 間 (しばら) く介然としてこれを用いれば、路を成す

孟子曰く、山間の小道は、ある期間常にそこを往来すれば、自然とそこに道ができる。

しばらく用いなければ茅が小道を塞いでしまう。学問又然りである。 (盡心下の 2 1)

諸侯の宝は三あり。土地・人民・政事なり。珠玉を宝とする者は必ず災い身に及ぶ。

(盡心下の 2 8)

(孟子が弟子を取る場合) 往く者は追わず、来る者は拒まず。 (盡心下の 3 0)

仁と義

孟子曰く、人皆忍びざる所あり。これを忍ぶ所に達するは (従来気の毒に思わなかった所に) 仁なり。人皆為さざる所あり。これを為す所に達するは (従来平気でしてきた所に)、義なり、と。 (盡心下の 3 2)

心を養うには、寡欲が一番

孟子曰く、心を養うは、寡欲より善きはなし。 (盡心下の 3 5)

狂者と獯者

郷原は徳の賊

似て非なる者を悪む



(盡心下の 3 7)

五百年毎に聖人は現れる

堯・舜より湯まで五百年

湯より文王まで五百年

文王より孔子まで五百年

孔子より孟子まで百有余年

(盡心下の 3 8)